

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

9

2015 September / October
TAKE FREE
NO.31

特集
庄内藩校 致道館

庄内憧憬
徳川 恒孝
徳川宗家 第18代当主



Cradle

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2015 September / October
平成27年9月1日発行(隔月奇数月発行)第6巻1号(通巻31号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)株式会社 出羽庄内地域デザイン
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3(株)フューチャー・コミュニケーションズ 電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



鶴岡市 / 大日坊 田園

黄金に輝く 実り多き庄内の秋

 庄内銀行

平和な日本を築いた武士たち。
これからの二百五十年が、再び
平和の時代であることを心から祈って。

薩長軍と戦わざるを得なかつた盟友

徳川恒孝

庄内の殿様、酒井忠久様と奥方様には随分とお世話になり、何回も庄内へご招待をいただきました。「松ヶ岡」の古くて広い木造の建物の中のお蚕様の育成の様子や、ダリアの花が素晴らしかったこと。とても美味しいイタリア料理でご馳走をいただいたこと。羽黒山登山でヘトヘトになったこと（その登山の時にいただいた、名前刻印入りの六尺の杖は今も我が家の玄関の傘立てに入れてあります）、小さいけれどなかなかの美術館を拝見したこと、そのほかにも庄内の皆様の温かい心に触れることができた想い出は尽きません。

さらに、もう一つ。私と庄内酒井家との間には深い関係があると感じています。

私は高校生になると同時に、母の実家である徳川の家を継ぎましたが、生まれ育ちましたのは会津松平家ですから、幕末、共に薩長

軍と戦わざるを得なかつた盟友の子孫としての関係です。

会津藩は、幕末には北海道の防御、江戸湾の防御、京都守護職と矢継ぎ早の重戦で、財政はまったく破綻した状態のまま東北の戦争に突入する状況に追い込まれたから、共に戦った庄内藩からの支援、応援は本当にありがたかつただろうと思います。どんなに理を尽くしても聞く耳を持たず、とにかく戦争をしたがった薩長の人たちが、後に日清、日露の戦争を推し進め、太平洋戦争終結でようやく平和を取り戻したことを考えますと、戦国の世を二五〇年余の平和な時代に変えた家康公と、そのブレインたちの偉大さが解るように思えます。

今年の家康公没後四百年の年で、日光、久能山、三河松平郷など各地の東照宮や、岡崎大樹寺、増上寺、京都知恩院などで盛大な

式典が催されました。衣冠をつけて、抜けやすい木製の靴が脱げないように、袴の裾を踏まないように、長い長い石段を登り下る御墓所への参拝も無事に終わり、とりあえずホッとしています。

先日、岡崎城の付近を散策しましたが、そこは酒井家をはじめとして、後に日本中に広がった岡崎譜代の方々の発祥の地ですから、ここは酒井家跡、ここが誰その跡と小さなプレートでも建てられると、平和な日本を築いた武士たちが、こんなに狭い小さな処から広がっていったのかと、歴史の不思議さが解るのではないかと思いました。

これからの二百五十年が、再び平和の時代であってほしいと心から祈っています。



致道博物館 御隠殿から見る酒井氏庭園

とくがわ・つななり／徳川宗家第18代当主。1940年、東京都生まれ。1963年に家督を継ぐ。1964年に学習院大学を卒業後、日本郵船株式会社に入社。副社長などを歴任し、現在は顧問を務める。2003年、徳川記念財団を設立、理事長に就任。世界自然保護基金ジャパン(WWFジャパン)会長。著書に『江戸の遺伝』『日本人の遺伝』(いずれもPHP出版)がある。

致道館

庄内藩校

特集

Special Edition

鶴岡市の中心地に建つ国指定史跡「庄内藩校致道館」。
200年の風雪に耐えて庄内の歴史と文化的風土を物語るこの建物は、
東北地方で唯一現存する藩校建築として一般公開されているだけでなく、
市内の小学校などを受け入れて、致道館学習や論語の素読体験などを行っています。
今を生きる私たちに、致道館は何を伝えているのでしょうか。

致道館

〈協力〉
公益財団法人致道博物館、
致道館文化振興会議、鶴岡市教育委員会、
鶴岡市立朝暁第一小学校、鶴岡市立朝暁第三小学校、
鶴岡市立朝暁第六小学校、鶴岡市立栄小学校、
鶴岡市立羽黒第三小学校、鶴岡市立あさひ小学校、
他、鶴岡市の全小学校

〈参考資料〉
鶴岡市「史跡旧致道館一致道館記並びに工事報告書」(1970)
鶴岡市「広報つるおか平成21年1月号・2月号」(2009)
「親子で楽しむ庄内論語」選定委員会「親子で楽しむ庄内論語」(2012)
鶴岡市教育委員会「鶴岡市子ども像指導資料集」(2014.3)
致道館文化振興会議会報「抱朴」

講堂

歴史と教育内容

一 限目 は じ ま り

致道館はどのような学校
で、どんな教育が行われ
ていたのでしょうか。致道
館の創設者、酒井忠徳公
の子孫である酒井忠久
さんにお聞きしました。

一設を忠徳公に進言した白井矢太夫
も庄内藩における徂徠学の第一人
者。その教えをもとに困窮した農
政を立て直す姿をみた忠徳公は、
徂徠学を藩校の教学にすると決め
ました。「忠徳公は徂徠学が政治
に役立つ学問だと確信したんで
しょうね。幕府が朱子学以外の学



お話を
聞いた方

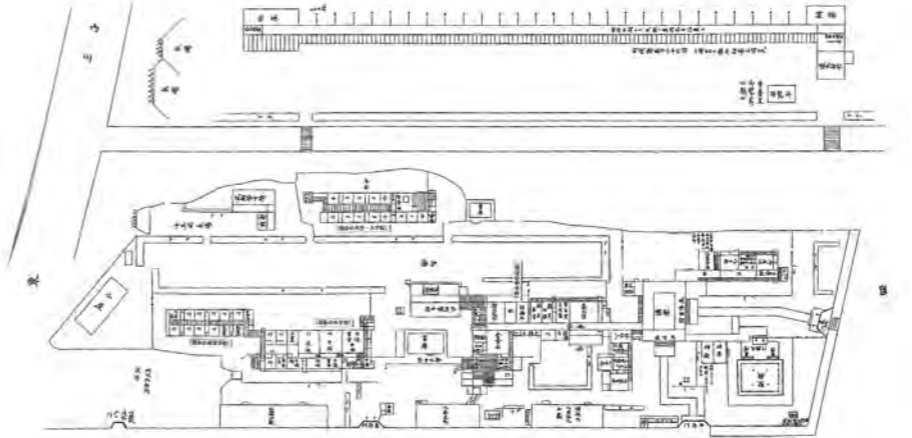
公益財団法人 致道博物館
代表理事・館長
酒井忠久さん

鶴岡市在住。旧庄内藩主酒井
家18代当主として、致道博物
館の館長をはじめ本間美術館
の理事など、数多くの法人・団
体などの役員を務めながら、故
郷庄内の振興に尽力中です。

文化2（1805）年、庄内藩
の土風の乱れを大きく憂えた庄内
藩主酒井家9代忠徳公によって創
設された庄内藩校致道館。現在は、
その管理と運営が致道博物館に
よって行われています。館長の酒
井忠久さんに当時の致道館につい
て伺いました。「致道館教育は、
天性を重視したことや、能力に合
わせた飛び級制度などいろいろあ
るわけですが、大きな特色は徂徠
学を教学にしたところですよ」。

現代でいう小学生から大学院生
までの約350名が学んでいた致
道館。その一貫した教学となった
徂徠学は、江戸中期に荻生徂徠が
提唱した学問です。庄内藩では水
野元朗が江戸で直接徂徠の教えを
受け、以来徂徠学を学ぶ気風が受
け継がれていきました。致道館創

昔の致道館間取り図



広大な敷地に小学校から大学院生までの学舎だけでなく、
馬場や矢場まで有した致道館では、一人一人の天性に応じた
個性教育と自発的に学び深める力の育成に努めました。

問を禁じた時代ですから、その覚
悟は相当だったと思います」。

致道館は開校後、天性重視、個
性伸長、自発的学習意欲の重視と
いった教育指針のもと、斬新な教
育内容を進めます。まず小学校に
相当する句読所では、「学校は少
年たちの遊び場だ」をモットーに、
子どもたちの興味を喚起する授業
が行われました。中学校に相当す



「致道館本」と呼ばれた教科書は致道館で出版して
いました。当初木製活字で印刷しましたが、後に版木印
刷となり、現在は317枚の版木が残されています。

る終日詰から上級では、自学自習
と会業（ゼミナール）で自ら学び、
深く思考し、実践する力を養成。
心身を鍛える鳥刺しや磯釣り、武
芸の稽古も熱心に行われました。
優秀な生徒は年齢や身分に関係な
く進級し、卒業後は能力に応じて
役職が与えられます。「通常は中
級以上の武士の子どもが入学する
のですが、優秀であればその他の
子にも門戸が開いたというので、
身分制度の厳しい藩政時代におい
て、自由さを持ったためずらしい学
校だったと思います」と酒井館長。
こうした致道館の教育は、思慮
深くて行動的な人間を多数輩出し
ました。『両羽博物図譜』の著書
を残した松森胤保や北海道開拓
に尽力した松本十郎もその一人で
す。また庄内藩に広まっていた土
風の乱れも収まり、次第に重厚沈
着で忠孝と道義を重んじる新たな
士風が生まれました。庄内武士道
ともいえるこの気風は、幕末にな
ると江戸市中取締や戊辰戦争など
で大きく発揮。武士道を重んじ、
敵味方区別なく礼節を守る姿に称
賛の声が上がるまでになりました。
明治（1873）6年、致道館
は68年の歴史に幕を下ろします。

酒井忠徳公（1755～1812）
13歳で家督を継いだ酒井家9代、
第7代庄内藩主。江戸から初め
て庄内に帰国する際、経費を調
達できず涙を浮かべたことから
農政改革を断行し、致道館を創
設。庄内中興の名藩主といわれ
ています。

致道館
当所は現在の鶴岡市大宝寺に
創建。11年後の文化13年に、忠
徳公の跡を継いだ酒井家10代藩
主忠器公が、政治と学育の一致
をめざして鶴ヶ岡城近くの現地
に移築しました。致道館の名称
は論語の中の「君子学んで以テ
其ノ道ヲ致ス」から。

徂徠学
江戸時代中期の儒学者、荻生徂
徠（1666～1728）が提唱。
後世の注釈にとられず、古い
字句を直接読むことで孔子の教
え（儒教）を研究する「古文辞
学」を確立。私塾を聞き、太宰春
台や服部南郭らの門人を輩出し
ました。8代将軍吉宗の助言者。

水野元朗（1692～1748）
庄内藩家老、儒学者。江戸詰め
の際、疋田進修と徂徠に学び、庄
内藩に広めました。致道博物館
収蔵の「徂徠先生答問書」は二
人の質問に徂徠が答えた書簡集
です。

白井矢太夫（1753～1812）
庄内藩中老、儒学者。江戸で徂
徠学を学び、帰国後、忠徳公の
信任を得て農政改革を実施。忠
徳公に、藩校をつくらせて人材教
育をすることを勧め、初代祭酒
（校長）となりました。

朱子学
儒教を南宋の朱子が再構築した
学問で、日本では、万物には必ず
上下がある、とする林羅山によっ
て江戸幕府に取り入れられました
。寛政2年（1790）、朱子学
以外の儒学を禁じる「寛政異学
の禁」が発令。それに反して徂徠
学を藩学にしたのは庄内藩と彦
根藩のみと言われています。

被仰出書（おおせいだされしよ）
致道館開校にあたり、酒井忠徳
公が教職員に与えた命令書。
「人には生まれつき得手・不得手
があるのだから、その人の長所を
伸ばすように日頃から話し合っ
て教え導きなさい」といった意味
の教育方針や指導上の留意点
などが細かく記載されています。

特集 Special Edition
庄内藩校
致道館

祖徠学から庄内学へ

二限目 つなぐ

致道館廃校後、その教学精神は「庄内学」へと少しずつ変化しながら、今に受け継がれてきました。誰が、どのようにつないできたのでしょうか。

学問を重視するその姿勢から、幕末の戊辰戦争のさなかでも授業を継続していた致道館。明治6年の廃校後も、先生方の自宅などでそれぞれに学び合いを続けました。致道博物館の犬塚幹士さんは話します。「廃校になってからもこうして学び合いが続いたのは、全国的にもめずらしいことだと思います。戊辰戦争で朝敵とみなされ、



明治24年、致道館にて副島種臣を囲む志篤公と旧士族たち。鶴岡人の気質を称する『沈潜の風』は、この時の副島の言葉といわれています。

戦後は賊軍となつてしまった庄内藩にとって、学問は国を立て直すための重要なものだったんですよ。特に明治からは西郷隆盛の教えも加わるようになって、学びの内容も次第に変化したようです。戊辰戦争では敵対する立場だった官軍の西郷隆盛。しかし敗戦後の人道的な処遇が西郷の配慮だったことを知った庄内藩では、旧藩主忠篤公や旧中老の菅実秀を筆頭に、旧藩士たちがこぞって鹿児島に行つて西郷の教えを受けるようになり、その影響で祖徠学以外にも孟子や陽明学などを学ぶようになり、明治24年に明治政府の副島種臣が鶴岡を訪れ、藩主や旧士族と教学について話し合った際には、副島から「庄内はもはや祖徠学ではなく庄内学だ」と言わ

お話を聞いた方



公益財団法人 致道博物館 理事
犬塚幹士さん
鶴岡市在住。父は致道博物館初代館長の犬塚又太郎氏。昭和31年から同館の学芸員となり、平成5年には齋藤茂吉文化賞受賞。庄内民俗学会代表幹事。日本民具学会監事。

れたという逸話が残されています。明治25年には、それぞれに勉強会を開いていると、徒党を組む恐れがあると考えた菅実秀の発案で、酒井家邸内（御隠殿）にあった蚕室を学問所とする「文会堂」が発足。昭和25年、酒井家が御隠殿を



明治24年から昭和30年代まで庄内学の学び合いが続けられていた文会堂。その看板は現在、致道博物館の御隠殿に掲げられています。



明治36年1月、御隠殿（蚕室）の文会堂で開催された兎汁会。兎狩りは磯釣りと同様に致道館時代から心身鍛錬の一助として奨励されていました。

含む建物や土地などを致道博物館の前身となる「財団法人以文会」に寄贈した後も、文会堂での学び合いはしばらく続けられます。また、14歳から20歳までの青少年を育成するために、大正10年には文会堂内に「少年会」が発足し、論語の勉強会や海浜学校などが昭和30年代まで続きました。「今、毎年夏に致道博物館の御隠殿で開催されている少年少女古典素読教室はこれを引き継いだものですが、藩校時代の流れを継ぐ論語の素読会は、全国的にみても鶴岡にしかないと思います。それは、旧藩主の子孫がここに暮らしながら地域の文化振興に努めていることも含め、皆で藩校致道館の精神を大切にしてきたからだだと思います。それが一つの伝統となつて、今の鶴岡の教育風土や『沈潜の風』と称せられる鶴岡の気風をつくり上げたんだと思いますの」と犬塚さん。



副島種臣の言葉「沈潜の風」とは、いつもは深く静かに力を養い、いざとなつたら力を発揮する鶴岡人の気質を評したものです。もとを辿れば致道館教育に行き着くといわれています。

閉館後の致道館

致道館の建物は閉館後、県庁や警察署、学校とさまざまに活用されるたびに変貌が進みました。明治41年には校舎が新築され、朝陽第一第二小学校が創立。長く小学校となります。終戦後、文化遺産の再評価が進んだことから、当時の加藤精三鶴岡市長が国に申請し、昭和26年に国の指定史跡に登録。小学校移転後は鶴岡市中央公民館になった時期もありましたが、売却された聖廟や廟門を買い戻し、保存修復工事を続けるなどして、昭和47年から「庄内藩校致道館」として一般公開が始まりました。現在は無料公開されています。

庄内と西郷隆盛

庄内藩は、西郷隆盛による戊辰戦争の人道的な戦後処理をきっかけに、西郷と「徳の交わり」と呼ばれる交流を重ねました。中でも戊辰戦争で庄内藩をリードした菅実秀は、松ヶ岡の開墾事業を西郷に相談するなど特に親交を深めました。そして西郷の名誉が挽回した明治23年には、西郷の教えをまとめた『南洲翁遺訓』を出版し、全国各地に配布しました。その経緯から酒田市の南洲神社には、西郷と菅が祀られています。

孟子と陽明学

孟子は孔子の思想を継いだ中国の儒学者。性善説を主張し、仁義による王道政治を目指しました。陽明学は中国の王陽明がおこした儒教で、孟子の系譜に連なります。

庄内松柏会

中国古典などの勉強を通じて人づくり、むらづくりを図ろうという動きは農業の分野にも広がりました。昭和11年、鶴岡市家中新町の松柏会館を拠点に、農業技術の向上と農業振興、人材育成に寄与する目的で「庄内松柏会」が発足。一時は会員数が3000人にも及び、小説家の藤沢周平もその一人でした。現在も「片手に論語（学問）、片手に鋤（農業）」を合い言葉に、その活動は続けられています。

致道館文化振興会議

平成6年、中国在住で孔子の75代子孫にあたる孔健氏が、鶴岡市に孔子のブロンズ像を寄贈したことをきっかけに、平成8年に発足。孔子祭を復活させ、未来を担う子どもたちに致道館の教学精神を伝えようとするさまざまな活動を行っています。

庄内藩校 致道館

特集 Special Edition

明治6年の廃校からおよそ1世紀が過ぎた昭和40年から62年にかけて、致道館は当時の建物を一部修復し、復元されました。「平成8年の『致道館文化振興会議』の設立にあたっては、東北で唯一、藩校の建物が残っていることに意味がありました。昔の人々がここで何を学んだのか、その精神と伝統文化を後世に伝えることを目的に活動しています」と話すのは、同会議副会長の水野貞吉さんです。

同会議では主に鶴岡市の小中学生を対象とした事業を行っています。その一つが「少年少女古典素読教室」です。素読とは、漢文の意味を追わず大きな声で読みあげ学習方法。この素読教室は、昭和43年から始まり、現在は致道博物館と鶴岡市中央公民館の三者の共催で、毎年5月から8月までの毎週土曜日に行われています。

また、書くことでも論語に親しんでもらおうと「論語書道展」を開催。今年18回目となるこの展覧会は、当初50点ほどの応募でしたが、今では千点を超える作品が寄せられるようになりました。

読み書きを通じた取り組みが子どもたちにどんな影響を与えているのか、それをよく表しているのが「児童・生徒論語作文」の発表です。毎年『庄内日報』の紙面でも紹介される作文は、子どもたちだからこそ書くことのできる豊かな感性であふれています。「子どもたちが自分の考えを表現した作文が素晴らしいんです。私たち大人に感動を与えてくれますね」。

また、一般市民向けには、毎年9月に「致道館の日・孔子祭」が行われています。孔子祭は、孔子の儒学をよりどころとした教育の中心となる重要な祭典（釋奠）^{せきでん}。藩校時代の致道館でも行われ、実際に使われていた楽器や祭器が、現在、致道博物館に保存されています。同会議ではこの祭典を復活させようと、東京・湯島聖堂の指導を受け、平成12年に128年ぶりに斎行。また、平成19年には「第6回全国藩校サミット」が鶴岡市で開かれ、これを機に「致道館の日」が制定されました。全国の藩校の中でも、当時の建物が現存し、地域をあげて普及に長く取り組みでいるのは珍しいようです。

「致道館が廃校後も、形を変えながら子どもたちが学ぶ下地が作られてきたことは大きいですね」。学びの地としての風土は、志をそのままに伝えられています。

致道館文化振興会議

三限目 ひろげる

風土性を育んだ致道館、そして庄内学という文化。先人たちの志は、今、地域でどのようなひろがりを見せているのでしょうか。



「致道館文化をみんなのものに」をテーマに、平成8年に設立された「致道館文化振興会議」。子どもたちを中心とした生涯教育につながる活動を行っています。

Information

平成27年度「致道館の日・孔子祭」 9月26日(土)

12:30～ 孔子祭・致道館の日 式典[致道館]
基調講話「『致道館の日』に寄せて」山田陽介氏(元鶴岡中央高等学校校長)

14:20～ 児童・生徒論語作文発表会[荘内神社 参集殿]

15:00～ 記念講演会[荘内神社 参集殿]
「徂徠学受容にみる庄内の眼識—水野元朗・疋田進修から寛政異学の禁まで」
瀬尾邦雄氏(国立茨城工業高等専門学校嘱託教授)

お問い合わせ：事務局 ☎0235-22-8298(三矢)

特集 Special Edition

庄内藩校 致道館

お話を聞いた方

水野貞吉さん
致道館文化振興会議(橋本政之会長)には、平成10年に入会、現在、副会長。朝暁三小のクラブ活動で、素読の講師も務められています。(公財)庄内南洲会理事。

1. 11月に鶴岡市中央公民館で開催される論語書道展。小4～中3まで毎年の課題を展示。一昨年は応募数が1000点超。2. 致道館での校外学習。「致道館クイズ」に全問正解すると入学許可証がもらえます。3. 荘内大祭では「少年隊士」が素読を披露。4. 1日1題の「庄内論語カレンダー」。5. 致道館の日・孔子祭。祭典では、橋本会長が祝文を奉読。6. 少年少女古典素読教室は致道博物館を会場に、経験の有無によって甲乙クラスに分かれて行われます。今年は21名が参加。夏休み期間中は毎日、早朝素読を行います。

子曰く
学んで而して之を時習す。
亦説ばしからずや。

(現代語訳)

先生がおっしゃいました。
学んだことをおさらいして身に
つけることは、
なんと嬉しいことではないか。

論語のこの一節は、一般の教科書などに載っているものとは読み方が微妙に異なります。これは、致道館の教えのもとに生まれた「庄内論語」独自のものです。「仁」を重んじ、「忠(まごころ)」「恕(思いやり)」の教えを大切にしたい約50章から成る論語。これが子どもたちの生活の指針になればと、鶴岡市教育委員会では55章を選び、平成24年に『親子で楽しむ庄内論語』として1冊にまとめ、市内すべての小中学校に配布を開始しました。現在、庄内藩校致道館統括文化財保護指導員を務める富樫恒文さんは、この冊子の編集に携わったお一人です。「庄内論語はどれも気持ちの良いリズムで読むことができます。大きな声で読むと、自分の耳で聴ける。それを繰り返すうちに体で覚える。学びを身体化すると、何かに迷った

藩校致道館の精神は、鶴岡の教育風土の原点。
ふるさとの心を伝える「庄内論語」には
人が生きる上で大切な、不易の教えが綴られています。



学校教育と庄内論語

四限目 みらいへ

ふるさとの教育の原点
である致道館の精神は、
「庄内論語」の美しい言葉で、
これからの未来を
生きる子どもたちに届
けられています。



1. あさひ小では年5回の論語集会で日頃の素読の成果を発表します。2. 朝陽六小の論語集会では6年生が論語劇を披露。論語を行動化して今の生活にいかすため、学校生活の一場面を寸劇に。3. 素読がオープニングを飾る栄小の学芸発表会。4. 羽黒三小では月1回の論語の日に素読をしています。5. 致道館を会場に先生を対象とした研修会を実施。6. 朝陽三小の日本伝統文化クラブでは10年来、論語の素読を実施。致道館文化振興会議の三矢正士さんら3名が講師を担当。「日本の文化を知って未来の糧に」とクラブ員の皆さん。



小学校入学時に配られる『親子で楽しむ庄内論語』。教育委員会と有識者で論語を選出。題字は致道博物館の酒井忠久館長。
※致道館、致道博物館で購入できます。

り、悩んだりした時に必ず生きてくるはず。子どもたちには心と身体バランスのとれた人に育ってほしい、そんな願いを込めてこの本は作られました。

冊子には、原文、書き下し文、現代語訳、語句の解説がまとめられ、どれも現代に通じる内容で、「親子で楽しむ」とあるように、大人にも学びの多い内容となっています。2千5百年前に説かれた論語を分かりやすく伝えたこの冊子の発行を機に、各学校で庄内論語を通じたさまざまな取り組みが行われるようになりました。朝の会や帰りの会での素読、「論語の日」「今月の論語」などを設けた暗唱活動。校長先生による講話や道徳の時間への導入。全校朝会や創立記念式典、学校祭での群読など。また、致道館の「被仰出書」

が指導者への教育方針を示していたように、庄内論語が先生の初任者研修に使われるなど、子どもと先生が共に学び合う教材として、世代間の懸け橋にもなっています。「子どもたち一人一人の個性とその才能を伸ばし、知識の詰め込みではなく、自ら考え、学び、体得して実践する。論語は、人間にとって大切な不易の教えを伝えてくれるんですね。人々の生き方にも価値観も多様化する現代社会の中で、思いやりの心を忘れずにいてほしい。ふるさとの教えには、子どもたちの輝く未来を心から願う、温かな想いが託されています。

お話を聞いた方



庄内藩校致道館
統括文化財保護指導員
富樫恒文さん

鶴岡市在住。朝陽一小の校長を経て現職。致道館での子どもたちの校外学習や先生方の研修の講師として、致道館教育の歴史、伝統文化を伝えています。致道館文化振興会議理事。

特集 Special Edition
庄内藩校
致道館



庄内写真季行 24 酒田市・新井田川

朝日を受けて朱色に輝く空。
二度と見ることのできない
感動の瞬間を切り取る。

10月下旬の明け方、カワセミの写真を撮りにいつものポイントに向かった。新井田川にさしかかったあたりで東の空が徐々に赤くなってきた。急いで車から降りて、橋の中央にある少年の銅像にレンズを向けた。スワンパークに

飛来したばかりの白鳥が、鳴きながら田圃の落穂ひろいへ飛んで行く。その姿に、自然とシャッターの指が反射する。このような朝焼けは一年を通してめったに見られない。見慣れた町の風景の中にも感動の出会いが待っている。



陽だまりの ラズベリー

ローズレッドの鮮やかなドリンクは
庄内町のラズベリー農家と酒店
酒田の酒造会社がタッグを組んで開発した
庄内町産ラズベリー100%のフルーツリキュール

フランス語の「フランボワーズ」の名で知られ、ケーキやジャムなどのスイーツに加工されることが多いラズベリー。最近は健康面での効果もあって、需要が高まっているが、実は国内に出回っているものほとんどが輸入物だという。そんな中、無農薬・無化学肥料で栽培されたラズベリーを、100%使用したリキュールがある。

栽培しているのは庄内町で「はらぺこファーム」を営む高橋紀子さん。庄内初のラズベリー農園を実現させ、生産から加工販売、観光農園までを手掛けている。リキュールの製造は酒田市の「楯の川酒造」。日本酒がメインの蔵元だが、鳥海高原ヨーグルトを使ったリキュール「子宝」を製造販売して以来、県内のさまざまな果物でリキュールのシリーズ展開をしている。そして販売は庄内町の酒屋「和洋酒うめかわ」。店主の三浦政司さんはこの農工商連携の仕掛け人だ。

「三浦さんも楯の川の佐藤淳平さんも同世代なので、けっこう話が合って」と話す紀子さんは、販売から5年経った今、この商品の存在意義を実感しているという。同じ5年ほど前に庄内町商工会の1店逸品研究会に参加するようになって、商人同士が叱咤激励しながら歩む経験を重ねているからだ。「若い時は何でも自分の力でと思っていたんですが、今は地域の中で互いを必要としながら進む大切さを感じるようになりました。それが地域を守ることに、地域の自立につながりますから」。

ラズベリーリキュールの甘酸っぱい香りと爽やかで芳醇な甘さ。その秘訣は庄内にふりそそぐ太陽の光だけでなく、地域を想う心にもあるようだ。



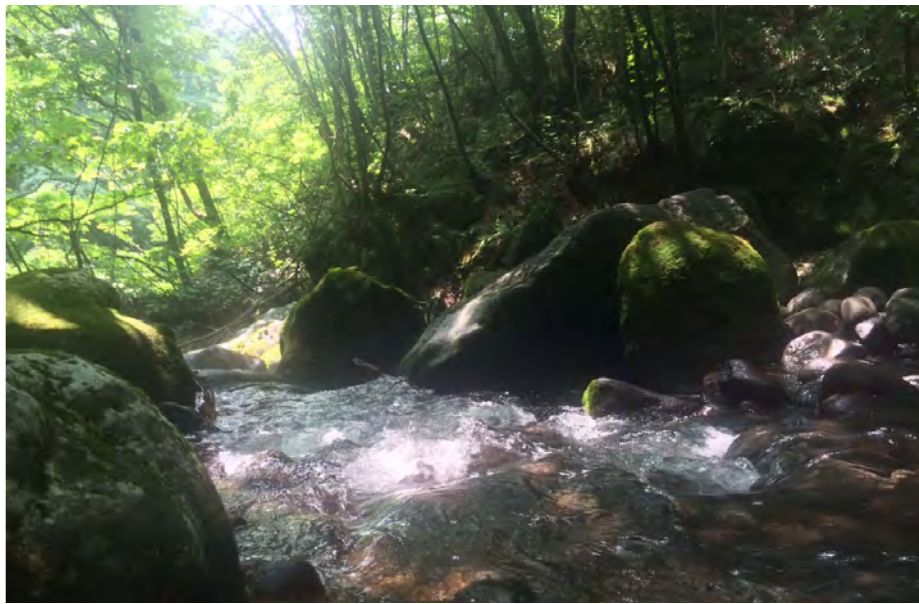
写真は、ストレートとロックとソーダ割り。「陽だまりのラズベリー」は下記にて販売しています。

和洋酒うめかわ ☎0234-42-2466 (HP販売もあり)

庄内町新産業創造館クラッセ ☎0234-42-1777

はらぺこファームでは、自家製ラズベリーとブラックベリーの加工品のほかキウイやユズを使った「あったまっちゃ」シリーズも加工販売しています。

はらぺこファーム ☎090-1491-4409



高瀬峡

水音をたどり 水澄む高瀬峡を歩く

日に日に空が高く澄み、雲の形も美しくなる頃
空を見上げる機会が多くなる。慌ただしい
日常の中にも日々それぞれの表情がある。
ふと自然の中に身を置きたくなり、
水音を求め出かけた。

季語

水澄む

(みずすじ)

秋の季語。川や湖など
の水がことさら清らかに
感じられる。

水底に木の実溜まりといふがあり

—水内慶太

水音が次第に大きくなると、「瀬戸橋
(吊り橋)」が見えてくる。橋の袂から川
岸に降りたところにあるのは「屏風岩」。
ここはかつて鳥海山の修験者の禊の跡と
もいわれた。木漏れ日が水底をレリーフ
のように蒼く浮かび上がらせる。上流か
らの水は勢いを増し、苔むした岩に飛沫
を散らして、下流へと逸る。



大文字草

遊佐町藤井地区から林道に入り、車を
走らせると「山ノ神」の祠のある駐車場
にたどり着く。そこから登山口に入り、
高瀬峡を歩いた。高瀬峡は鳥海山の麓に
ある谷で、沢沿いに森の中を2、3時間
で往復できるトレッキングコースである。
歩き始めて間もなく、「山ノ神湧水」に
出た。鳥海山の伏流水は、その透明度に
いつも驚かされる。滾々と湧き出る水音
は静かであるが、尽きることのないこの
水に生かされていることを実感する。

水音に金水引の糸揺るる —あべ小萩

橋を渡ると、やがて杉の植林地の登り
となる。鳥海山のアプローチとは思えな
いならかな道である。足裏に伝わって
くる感触は、普段アスファルトの上では
味わえない心地良さである。その足もと
には釣舟草や金水引が咲く。

優しいせせらぎが聞こえてくると、緩
やかな流れの小川が目の前に現れ、川岸
には大文字草が揺れている。小川を渡り、
道を進むと、苔むした岩がごろごろと存
在感を増してくる。滝音は次第に大きく
なり、目の前にジグザクに水が流れ落ち
る「蔭の滝」が姿を現す。滝壺は美しい
水色を湛え、水底まで美しく輝く。



蔭の滝

大文字草滝のしぶきの中に摘む

—土屋淑子

森の中には、さまざまな水の音がある。
静寂の中で聞こえることさら癒やされるのは、
水音と心拍のリズムが同じだといわれて
いるからだろう。その癒やしの空間に時折
鳥の音が分け入ってくる。森の中に届く
優しい木漏れ日と風が、誰しもを優しい
気持ちにさせてくれる。

水音を違へて秋の高瀬峡 —あべ小萩

二つ目の吊り橋である「婆々沢橋」を
渡り、尾根まで登りきったところで、木々
の間から鳥海山の頂がすぐ間近に顔を
出す。谷底からのぼってくる風と戯れる
ように、目の前をオニヤンマが横切る。
トレッキングコースの終点は落差二十数
メートルの大滝。勢いよく落ちる水を眺め、
その水音を聞きながらただ自然に身を任
せていた。
水が育む豊かな生命。四季があるおか
げで、自然の彩りの豊かな日本では、水
や風の音、虫や鳥の声まで詩となり癒や
しとなる。水音の違いを楽しみながら来
た道をたどった。



金水引



釣舟草